筑前琵琶

上原まり

平家物語の世界

特別出演
藤舎呂浩

800年前、美しい夕日と共に遥か西の海に消えていった平家の人々。
その哀れではかない物語は、崇高な響きの天台声明を原点とし〝平曲〟として、この世に永遠の命を与えられたのです。
平家物語、それは日本人の心のよりどころ。
その底流にある仏教思想と共に、いにしえの人々の叫びと息づかいが、今、聞こえてきます。

演目

祇園精舎　那須与一
平家栄華　壇の浦
南都炎上　入道死去

平成二年
九月二十九日(土)
午後七時開館

たんば田園交響ホール
(全席指定)
入場料金/2,800円
(当日3,300円)

壇の浦海戦図（山口県・赤間神宮蔵）

お問い合わせ **たんば田園交響ホール** ☎0795(52)3600
〒669-23 兵庫県多紀郡篠山町北新町41

前売券発売所 ■篠山町内/書店・楽器・レコード店・役場支所 ■多紀郡内/各町公民館(各農協で取次)
■氷上郡/春日町文化ホール・柏原観光案内所 ■三田市/ニチイ三田店サービスコーナー ■京都府/両丹プレイガイド

9/29
SAT
土曜日

午後7時開演

筑前琵琶
上原まり

■演　　出／水口一夫
■特別出演／藤舎呂浩

●演目／〔第一部〕祇園精舎　〔第二部〕那須与一
平家栄華　壇の浦
南都炎上
入道死去

上原まり　―1981年、宝塚のトップスターから琵琶奏者へ転身―

昭和22年、筑前琵琶旭会総師範二代目紫田旭堂の一人娘として生まれた。初代旭堂は、祖父で柔道家でもあった。6歳のころから、母旭堂に琵琶のてほどきを受け、中学3年のときには、邦楽コンクール琵琶部門で、「扇の的」を演奏し、第三位入賞。初舞台は1981年9月三越名人会で、「大物の浦」を独奏。翌月、都倉俊一グランドオーケストラと共演。渋谷ジァンジァンでは「平家物語」を中心にした定期演奏会を開催。1982年8月、NHK教育TV「ふるさと歴史紀行・探訪源平合戦記」のレポーターに抜擢された時、「祇園精舎」を自ら作曲。

1985年、京都・神戸といった「平家物語」縁の地での800年記念ツアー等でこの年特に、幅広く活躍。1987年、神戸市文化奨励賞および第1回ベストフットワーカーズ賞を、1988年、神戸新聞平和賞を受賞。1989年には松尾芸能賞・古典芸能優秀賞を受賞。また1989年にはニューヨーク、シアトル、ハワイでの海外公演を実施し、大成功をおさめた。

藤舎呂浩

昭和29年初舞台、二世家元藤舎呂船の内弟子となり同34年藤舎呂弘を名乗るが、61年藤舎呂浩と改名。昭和56年アジア音楽祭歌舞伎舞踊公演に参加(香港)。昭和59年には、東南アジア舞踊公演に参加する。

現在、国立文楽劇場舞踊自主公演で活躍する他、上方文化芸能協会、大阪花街連盟、日本舞踊協会関西支部等の要職にある。

琵琶―はるかシルクロード通り、伝わってきた異国の楽器

琵琶は、東と西の人と文明を結ぶ砂漠の大回廊、シルクロードを通り、唐の時代に日本伝来した異国の楽器のひとつである。繊細かつ尊厳な音色と陰影のある深い響きを持ち、現在奏されている琵琶には、筑前琵琶、雅楽琵琶(楽琵琶)、平家琵琶、盲僧琵琶、薩摩琵琶などがある。

京都では、鎌倉初期に琵琶を伴奏に語る平家物語＝平曲がつくられ、雅楽と盲僧琵琶と声明との混合による全く新しい音楽であった。

薩摩では、室町時代末から島津家の重用をうけて、薩摩盲僧琵琶が発展していったが、一方、筑前盲僧琵琶はふるわなかった。しかし晴眼者もこれを奏するようになる明治時代が到来すると、その20年代には、橘智定（のちの旭翁）が博多で新しい語りもの琵琶を起こし、女性でも弾きこなせる琵琶＝筑前琵琶を創作し、明治後期には、筑前琵琶はついに全国に広く知れわたり、薩摩琵琶とともに邦楽界の人気を二分するようになったのである。

曲目解説

祇園精舎

祇園精舎の鐘の声は諸行無常を伝え、沙羅双樹の花の色は、栄えるものは必ず滅びる理を表す。奢れる人も猛き人もその運命を逃れることはできない。

平家栄華

平治の乱後、清盛の躍進はめざましかった。翌永暦元年（1160）には位下大宰大弐から従三位に進み、同年更に参議に任ぜられた。公卿16人、殿上人30余人、諸国の受領、衛府諸司あわせて60余人という繁栄ぶりであった。

南都炎上

入道死去

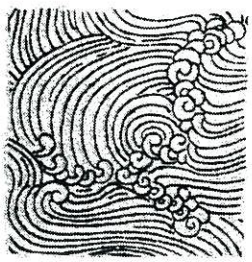
清盛の妻二位殿が地獄よりの使者が火の車で無間地獄から清盛を迎えに来る夢はまさに正夢。清盛は激しい熱病にかかって悶え苦しみ、「仇敵源頼朝の首はね、自分の墓前に備えることが供養になる」と言い残し、64才で死を迎える。

那須与一

海には、平家の赤旗がひるがえり、陸には、源氏の白旗がひしめく。屋島の戦いで、平家の小船が舳に桧扇を立て、これを射よと挑発する。義経は那須の与一に射落とせと命じる。与一は見事に射落とし、敵味方ともその腕前を誉める。

壇の浦

戦いが次第に激しくなった時、白旗が源氏の上に舞い降り海豚という魚が、「真っ直ぐ通れば味方が危い」という占いが言い終わらぬうちに、平家の舟の下を通り抜けた。

重能は、子息教能が生け捕りになっているため、心変わりして、源氏に合体し、また四国・九州の武士たちも源氏についた。平家も今日で限りと見えた。知盛は御所の舟に参って、手づから舟を掃き浄め、二位の尼は、安徳帝を抱き奉ったまま、波の底に入り、建礼門院も同じと海に入ろうとするが渡辺昵が小舟を寄せて引き上げる

教盛、経盛、資盛、有盛、行盛ら、次々に海に沈む。宗盛の乳人景経は、宗盛の目の前で首を取られる。教経は義経の首をとろうとして源氏の船に乗りうつるが、義経を逃し、海に入る。安芸太郎実光も入水。知盛は乳入子家長と手を取り合って沈み、20余人の侍たちもその後に続いた。海上にはただ平家の赤旗が散り浮かび、主のない舟が波にただよい源平合戦が終わりを告げる。